

---

# 黒猫の予感

百合茶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒猫の予感

### 【Nコード】

N4995C

### 【作者名】

百合茶

### 【あらすじ】

『黒猫が前を通ると不吉な事が起きる。』じゃあ、黒猫をひいたらどうなるんだ？頭の中で何度も浮かび上がる、今朝の出来事。全ての始まりはここからだったんだ。

(前書き)

夏ホラー初参加作品です。

全ての始まりは、ここからだっただ。

バックミラーから間接的に目を射る太陽が、鬱陶しくて仕方がない。3年間乗り回している愛車も、がたがきてるのか、車内は蒸し風呂状態だ。助手席に座っていた永井がたまらず窓を開けた。やけに生暖かい風がべたべたと首筋に絡まる。

俺は、ペットボトルに手を伸ばし、気だるいコーラを流し込んだ。そう、まさにその時だったんだ。猫をひいたのは。

公園から飛び出した陰が、ちょうどコーラを飲むために突き出した左肘と重なって、俺はブレーキを踏みそこなった。

バコツ、という鈍い音とともに一瞬車体が浮き上がる。ハンドルを握り締めた。タイヤが再び地面を擦った衝撃の後、ガラゴロ、と低い唸り声が上がった。

その時見た光景は、きつと一生忘れられない。

不意にバックミラーが陰り、細長い小さなパノラマから、『動く静止画』と言った感じでゆっくり、はつきりと映ったんだ…

「で、何を見たんだよ？」

「昔のコレか？」

本宮が小指をピンと立てる。

永井がちつつちつと指を振るのを、俺は隣でアイスを食べながら黙って見ていた。

「その前に、こんな迷信を知ってるか？」

永井が話を切り替える。本宮と坂北の頭がぐつと近付いた。

俺は首筋の毛が逆立つのを感じた。

永井には妙な特技がある。どんな作り話も、あたかも体験したかのように語れる。実話なら尚更だ。

「黒猫が前を通ると、不吉な事が起きる。じゃあ、黒猫をひいたら、どうなるんだ？」

死ぬに決まってる。もちろん、ひかれた黒猫が。

でもアイツ、本当に死んだのか？

永井の語る『世にも奇妙な体験談』は、体験者である俺も不安にさせる。

鈍い衝撃音、一瞬浮き上がった車体　ハンドルを強く握った…。今朝の事だけに全て鮮明に覚えている。

最初、公園の前という事もあって、子供をひいたと思った。

慌てて踏んだブレーキが間に合わず、と言っよりも効かなかった。

焦った俺の前に現れたのは、バックミラーから睨む黒猫だった。

うず高く積まれたお中元の米やかつお節に囲まれた、本宮スーパーの休憩室に、新たな味噌ラーメンの香りがふわっと上がる。

そう言えばあの猫も、ふわっと宙を舞った。

バックミラーから見た映像が頭の中でコマ送りされる。

片目が潰れて泥を被っていたけれど、あれはもしかしたら脳味噌だったのかも知れない。

「坂北、まだ食うのかよ？俺んとこの店、赤字だぞ？」

「でも本宮のおばちゃんが、どうせ在庫だからって…」

坂北の口からむせるような味噌の香りが狭い空間に広がる。

半分だけの目がミラー越しにこっちを睨んで、耳や口から…

駄目だ、頭から追い出せ！

必死に言い聞かせ、ぎゅっと目を瞑る。

胃の中のアイスが迫り上がり、ぎゅっと喉を絞める。

「…きつ！広樹おまえ大丈夫か？」

本宮が肩を揺する。

「…大丈夫。」

唾を飲み込んで、辛うじて返事をした。

\*

『…き…広樹…』

肩を揺すられて、はっとハンドルを握り直す。危ない危ない。

深夜の大通り。車は反対車線に行きかけていた。

ふと永井の言葉を思い出す。

黒猫をひいたら、どうなるんだ？

運転中に寝るなんて、今までなかった。もしかしたら、あれはやっ

ぱり不幸の前ぶれなのか…？

そう思い始めると、信号や電光掲示板の赤い光が警告ランプに見える  
てくる。

赤い光…赤…

ぼろ雑巾のように千切れた四肢を力なく広げて宙を舞う猫。真っ赤  
な舌が異様に長かった。

ザラリ。

夜気に混じりこんで、湿っぽい砂のような風が首筋を舐める。

べたべたする。今日も相変わらず熱帯夜らしい。

パサリ。

俺の横で黒髪がなびく。

レイコだ。白いワンピースが闇の中で際立って、一段と白く見える。

彼女は微笑みながら、2枚のチケットを眺めている。

黒地に浮かびあがるタイトルは、『タイタニック』…  
あの映画って確か…

不意に沸いた疑問を口にしようと、彼女の方を向く。

「レイコツ？」

レイコの長い髪や細い腕が俺に絡む。

不意打ちの抱擁に、ハンドルが一気に右に沿れ、車は中央線をはみだした。

「…ねえ、覚えてる？」

レイコが滑らかな肌をすり寄せる。白い腕が更にきつく首に絡まる。

「レイコツ…離し…」

黒い髪が視界を遮る。何も見えない。息もできない。ブレーキを踏んだはずなのに、車が歩道に乗り上げるのが分かる。

そんなつ、ブレーキがきかない！

「覚えてる？」

パアアアアン

大型トラックによくある、派手なクラクションとともに、強い光が目を射る。

「ねえ、覚えてるでしょ？」

囁き声の後、長い舌のザラリとした感触が耳の中に入りこむ。

片方だけの金色の目、頭からべっとり被った泥。もう、レイコではない。

うわあああつ！

「広樹！」

乱暴に体を揺すられた。薄目を開けると、永井がいる。床に転がったケータイから、7時を告げるファンファーレが流れている。

…なんだ、夢か。ほっと息をついて、アラームを止めようと、床に手を伸ばした。

ハラリ

長い髪が一房、空から降ってきた。

\*

「…へえー、ミサンガねえ。」

「そう、願いが叶うと切れるってやつ。」

永井はそう言って、床に落ちたそれをつまみあげた。

昨日掃除した部屋に、お盆で里帰り中のレイコの髪が落ちるはずがない。それはよく編みこまれた、黒一色のなかなかシックなミサンガだった。

…コイツがこんなもの持つてるなんて、知らなかったな。

何か、願でもかけていたのか聞いてみると、

「豆腐の配達が無事終わるように。」  
と、はぐらかされた。

\*

本宮家は、元々豆腐屋だったらしく、今でも手作りの豆腐を作って配達している。昨日、猫をひいたのも、配達の帰りだった。

「上手くいつてるか？彼女と。」

車内の冷房をMaxにして、永井が問う。

何となく、レイコが化け猫になる夢を思い出したが、俺とレイコとの間に危機が訪れた事はない。一度もない。

「おまえ、恋人依存症だな。それも重症の。」

「何でだよ？」



「寝言で彼女の名前連呼してた。」  
寝言で恋人の名前がバレるなんて、カッコ悪い。おまけに恥ずかしい。

「遠距離してんの？」

「いや。今、沖繩に里帰りしてるだけ。」

「ふうん。沖繩ねえ。」

永井が意味ありげに眉を上げた、その時。

「おっと！」

公園から、小学生が飛び出した。

キキーツ

ブレーキ音が響く。それなのに、車の速度が落ちない！壊れてる！  
…違う、呪われてるんだっ！

猫をひいた時も、夢の中でも、ブレーキがきかなかった。だから今回も…

「広樹っ！ハンドルを切れっ！」

永井が叫びながら、ハンドルに飛び付いた。

景色が回る。スリップしている。頭がくらくたとして、不意に風が…

パサリ

『ねえ、覚えてる？』

『広樹、大丈夫か？』

すりむいた膝を擦っていると、本宮大地が駆け寄ってきた。

『…うん。』

小さく返事をして、辺りを見渡す。1台の車が電柱にぶつかっている。

『大地、どうしよう。』

『お、おれ、母ちゃん呼んでくる。』

大地はくるりと向きを変えて、本宮スーパーの方向へ走っていった。広樹はゆっくり立ち上がると、道路脇や溝を丹念に見回した。

『…あつた。』

植え込みの中に、薄汚れた野球ボールが落ちている。それと一緒に、誰かが落としたのか、タイタニックの映画チケットも落ちていた。

フロントガラスが砕け、車の骨組みがぐにやりと曲がっている。左足がシートに挟まって身動きがとれない。俺はハンドルに頭を預けて、目を擦った。信じられない。

たまたま膝の上に落ちたバックミラーを拾い、様子を伺うと、そこには小学生の自分がいた。

『思い出した？』

『ああ…。』

1997年、全ての始まりはここからだっただ。

11歳の俺は、危うく死ぬところだった。

片側一斜線の緩やかな下り坂。タイヤ痕がくつきりとついていて、事から、かなりのスピードだったと推測できる。飛び出してきた俺を避けるために、車は大きく道を沿って電柱にぶつかり大破した。

乗っていた若い夫婦のうち、妻が即死、夫も意識不明のまま3日後に亡くなったという。

『永井、ごめん。』

新聞の告別式の案内に載っていた名前は、『永井達司』。両親に連れられて、線香をあげたのも、墓を訪れたのも覚えている。

ハラリ

ミサंगाが降ってきた。真っ黒いそれは、髪の毛で編まれていた。

「レイコの髪の毛…」

「彼の願いは私の願いだった。」

レイコが震えた声で呟いた。

両親からは、若い夫婦だと聞いていたが、レイコはまだ入籍していなかったらしい。両家の反対が大きく、事実婚だったという。

「両親を説得して、結婚式を挙げるのが夢だった。」

…ああ。俺は二人の命と一緒に夢まで奪ってしまったんだ。

景色がチカチカと点滅する。割れたフロントガラスから風が入る。

夏なのに、寒いと感じた。

レイコ、永井、事実婚、ミサंगा…少しずつ浮かび上がってくる10年目の真実。

きつと同じ墓に入りたかっただろう。墓？レイコの墓って…。

大事な事に気付いた。

俺、沖縄までお線香あげに行っていない。

背を這う視線に気付き、バックミラーをのぞくと、いつかの黒猫が睨んでいる。

景色がかすみ始めた。救急車のサイレンが、ぐわんぐわん響いて遠退いてゆく。

ザラリ

首筋に、猫が触れたような気がした。

(後書き)

ちなみに、沖縄のお盆は『旧盆』ですので、2週間近く遅れてやっ  
てきます。

最後までありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4995c/>

---

黒猫の予感

2010年10月27日13時51分発行